防衛大学校本科第３９期及び理工学研究科第３２期学生卒業式における学校長式辞（平成７年３月１９日）

第6代学校長　松本　三郎

防衛大学校本科第３９期及び理工学研究科第３２期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、４年及び２年にわたる小原台生活に別れを告げることになりました。この間、防衛大学校における学生生活の中で、諸君が自らの青春を燃焼し、幾多の収穫と思い出をもって巣立って行かれるその事に対して、私は、心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄えある式典に、国務御多端の折りにもかかわらず御臨席を賜りました村山内閣総理大臣[注(1)]、原参議院議長[注(2)]、玉澤防衛庁長官[注(3)]をはじめ国会議員各位、また、平山東京芸術大学学長[注(4)]をはじめ内外多数の来賓各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

また、卒業に至るまでの間、防衛庁自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍・各国大使館等から寄せられた御指導・御協力に対しましても、併せて厚くお礼申し上げる次第であります。また、本校において教育訓練に、生活指導に、あるいは各般の校務に、日夜を分かたず尽力してこられた教職員・指導教官各位の熱意に対しましても、学校長として深甚の敬意と感謝を表したいと思います。

更にまた、遠路をも省みず本式典に御参列賜りました御両親・御家族の皆様方に対しましては、今日までの御援助に厚く感謝申し上げるとともに、立派に成長された御子弟の卒業を心からお祝いするものであります。

注(1)　村山富一

注(2)　原　文兵衛

注(3)　玉澤徳一郎

注(4)　平山郁夫

さて、３６１名の本科卒業生諸君、顧みれば平成３年の春４月、諸君が希望と緊張感に胸を震わせながら、桜花爛漫のここ小原台の門をくぐられた日のことを覚えておられることでしょう。また入校後もしばらくは、慣れない学生舎生活や規律ある生活に戸惑い、将来幹部自衛官として、その生涯を防衛の職務に捧げようという決意に若干の不安を感じていたかも知れません。それからの４年間、厳しい団体生活の中で勉学や訓練に励み、幾多の苦しい障害を乗り越え、試練に耐え、諸君は大きく逞しく成長いたしました。かくして、幹部自衛官となるべき決意と資質は今や揺るぎないものとなり、今や胸を張って堂々と卒業していく諸君を、私は自信をもって送り出すことができます。

タイ王国４名、シンガポール共和国１名の留学生諸君に対しましても、心から祝福を贈るものであります。異なる文化の下で、日本の友人と寝食を共にしつつ学んだこの貴重な経験は、必ずや将来諸君が誇り得る豊かな財産となるでありましょう。

さて卒業生諸君は、これから陸・海・空それぞれの幹部候補生学校において、初級幹部としての専門教育を受けるわけですが、諸君の幹部自衛官としての修業は、まさにこれからが本番であります。

いうまでもなく、国家防衛の任は重く、その道は険しいのであります。防衛問題や自衛隊に対する世間の理解や認識も必ずしも十分とは申せません。しかし、気力を充実させて逆風に耐え、困難に敢然と挑戦してこそ、そこに道は開かれ、苦しみに耐えてこそ、人間に幅と深さが加わるものであります。ダートマスにあるイギリス海軍兵学校の戦死卒業生名簿を安置してある石台に刻まれた碑文にある「心に遅れをとっていないか、腕に力は抜けていないか」は、我々にとってもまことに教訓とすべきものであります。しっかりと心に記憶し、不断の努力に努めて下さい。

諸君が入校以来しばしば耳にしてきたように、本校における教育目的の根幹をなすものは、「真の紳士にして、真の武人」を育成することにあります。このことは、自衛官としての確固たる使命感を自覚し、防衛の専門分野での知識・技能・体力を修練すべきことはもちろん、一人間として、幅広い教養と豊かな人間性を併せ持つべきことを意味します。防衛大学校の教育は、単に視野の狭い、特殊な戦争技術者の養成を意図したものではなく、広く国家社会の一員として、その職責を全うし得る資質の涵養を目的としていることは論を待ちません。諸君の先輩達は、こうした防衛大学校における教育の成果を、一旦緩急に備えての日常の地道な勤務訓練の中で、更にＰＫＯ活動や先般不幸にして起こった阪神

大震災の救援活動等の中で、見事に発揮してくれております。国民に信頼される、また国際社会に信頼される自衛隊の道を、一歩一歩着実に築いてきてくれたといえましょう。

こうした先輩達の業績を受け継いで、これから諸君の活躍する２１世紀の世界は、あらゆる意味で複雑化、多様化が進み、内外の情勢は益々不透明で予測し難くなることは必至です。そこでは、いかなる任務に就くにせよ、広い視野と高い視点に立った創造的で柔軟な思考力と的確な判断力、そして豊かな国際感覚が求められることになります。諸君に対し、幹部自衛官としての誇り高き任務を全うすべく、不断の研鑽と、気品に満ちた「一人間として修業」を怠らぬよう強く望む次第であります。

次に、理工学研究科７０名の卒業生諸君　－この中には、インドネシア共和国１名、タイ王国１名の留学生が含まれておりますが－　諸君に対し一言申し述べます。諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識と技能を修得し、研究すべく２年の歳月を本校において過ごしました。この間、頭脳の充電を図り、将来への大きな飛躍の基盤を培う貴重な体験を積んだのであります。最近の科学技術の著しい進歩は、軍事面においても装備の高性能化、複雑化などの質的変化を生み、軍事戦略及び戦術に大きな変革をもたらしていることは周知の事実であります。今後諸君は、それぞれ新しい任務に就かれることになるわけですが、広い視野に立って一層の研鑽に努められ、益々重要になりつつある自衛隊の科学技術分野における発展向上に尽力されるよう、切望するものであります。

さて、諸君の小原台生活の幕は、今まさに閉じられようとしております。これから先、諸君のあとに続く後輩達の模範となるよう、いかなる部署、いかなる境涯にあっても、学生綱領の謳う「廉恥、真勇、礼節」を座右の銘として育った防大出身者としての誇りを持って、堂々と前進して下さい。そして、陸・海・空それぞれに進むべき道は分かれようとも、同期生同士その友情と団結を更に強め、お互い力を合わせて、祖国日本の輝かしい将来と国際社会の平和のために挺身して行かれんことを、お別れに当たり心から祈念して私の式辞といたします。

諸君、卒業おめでとう。